

北海道聖化大会委員会

5月19日(火)〜20日(水)に、北海道クリスチャンセンターで行われた、第2回北海道聖化大会について報告致します。日本イエス・キリスト教団東京若枝教会の飯塚俊雄先生を講師としてお迎えしました。まず、セミナーが開かれ「松江バンドの日本霊界における意義」と題して教職者を中心とした聴衆に、日本のホーリネスの源流である働きを、資料を配布し、語られました。

続く聖会Ⅰでは「聖霊のバプテスマ」と題して、使徒の働き1章1節〜8節と2章1節〜4節が開かれ、聖霊のバプテスマの意義深さについて語られました。

20日の午前の聖会Ⅱでは、「天から火」と題してルカの福音書12章の49節〜50節が開かれ、罪を焼き尽くし、主を第一とする歩みについて語られました。

夜の聖会Ⅲでは「今日あなたがたがイザヤ」と題してイザヤの如く、私たちも福音宣教のために立ち上がる事の大切さが語られました。今回の聖化大会の参加者は延べ429名でした。

(尾澤拓也)

栃木聖化交友会

さる五月十七日の栃木聖化大会は、桑原信子師が主講師でした。特に人間関係のきよめが説かれ、全員献身を新たにしました。

終わりの日の困難な中であつて聖と伝道の急務が強調されて久しくなりました。しかし、イエス・キリストの再臨に関しては始動しにくい自動車のエンジン様です。個や同志会なら別かも知れませんが、私たちの間の内外の聖会では活き活きした説教なりが聞けないのではないのでしょうか。前代にあつた終末論に関わる不幸な出来事が氣遣いになつてるのであれば、改めて聖書はそれがいかに多く書かれているか、聖化は聖書をそのまま受け取ることを土台としている観点から見直したいものです。以前の事例の反省や教理の検討等多く語られ著されています。運動まとは行かないまでも高調されて然るべきです。「さあ、勇士のように腰に帯を締めよ」(ヨブ40・7)。再臨はこの世の論説や謀(はかりごと)の裁き、同時に主と御国の到来であることを覚えます。

(山田 隆)

秋の聖化大会主講師 パドゥー・メシュラムカル博士のプロフィール

インドに生まれ、ナザレン教会で信仰を持ち、インドで学ぶ。学位は学士(BA)、神学学士(BD)、神学修士(M.Div.)、宗教教育学修士(MRE)、牧会学博士(D.Min.)を取得。BDのためにユニオン聖書大学在学中に日本人宣教留学生と交わり、その繋がりで数度来日、説教奉仕をされる。

インド・ナザレン教会の牧師として1965年以来半世紀以上の奉仕を務める。その傍らインド・ナザレン聖書訓練大学において22年間教師として、また学長として奉仕する。また、ナザレン教会の諸教区でTEE(拡大神学教育)の奉仕を4年間務める。

1996年以来、南アジアのナザレン教会における伝道と教会建設の働きに携わる。特に、ネパールにおけるナザレン教会の開拓を助ける。超教派の働きとしては「ジーザス」映画伝道の主事、南インド聖書学校理事長(1983-2008年)、インド福音連盟理事、理事長等を務める。ご夫人はスタさん、ご長男はアトルさん、ご長女はソニヤさんである。

事務局だより

▶ 聖化第46号をお届けします。全国各地の聖化大会の祝福をお祈りいたします。

聖化

2009.9.20

日本聖化協力会機関誌

No. 46



きよめの説き方

宮城聖化交友会 日本基督教団 仙台青葉荘教会牧師 島 隆三

第二次世界大戦後、復興したホーリネスの群の最初の機関誌は「復興」であった。その初期の頃に佐藤雅文師が「聖潔の教理の検討」を連載している。そこで佐藤師はウエスレ一の「キリスト者の完全」と、当時日本語で読むことが出来るきよめに関する本一〇冊ほど(キーン、ワトソン、リダウト、トマス・クック他)を比較検討し、ウエスレーが説いたきよめの教理と、当時ホーリネスの群の説くきよめの教理とどこが違うかを指摘する。それを要約すれば、(一)ウエスレーはきよめを「キリスト者の完全」と題して主張し、「あなたは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。…隣人を自分のように愛しなさい」(マタイ22・37-38)、「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ5・48)に専ら中心点をおき、そのためにきよめの経験を伝え、その中に生きるために、極力意志の純潔を主張した。すなわち、積極的部分に力点を置いた。これに引きかえ、我らの主張の中心点は「私はキリストと共に十字架につけられた」(ガラテヤ2・19)に求め、その罪の消極的徹底すなわち「死」に中心を置き、消極的完全を主張する。その主張の中心が、一方は積極的、他方は消極的である。きよめはこの二方面を持つが、いずれか一方を主張するとしたら、積極的部分の主張がより強くはないか。殊にきよめの経験後の生涯において。(二)ウエスレーは「完全」を目標としている。これはきよめの経験と歩みの全体というよりは、むしろ歩みに力点を置く主張である。我らは、古き人の死、すなわち、経験にきよめの主張の中心点を置き、後から歩みを加えている。歩みを強く指し示しているウエスレーと、経験を強調する我らの差を見る。これも、経験後の生涯に非常な差をもたらす。我らの間に見られる欠陥は、ここに起因すると思われる。以上は、昭和二三年の「復興」に見られる佐藤雅文師の反省である。今日はずでに六〇年が経過したが、この佐藤師の指摘は今も注目すべきことではなからうか。今日は幸いにウエスレーの説教その他、きよめ関係の本も沢山出版され、自由に読むことが出来るようになったから、より豊富な資料を基に考察することが出来るであろう。このような地道な研究が続けられることを期待する。